

令和5年7月12日

処理水放出作業の進展を期待する～IAEAの報告書について

核兵器廃絶・平和建設国民会議

(略称 KAKKIN)

事務局長 岩附 宏幸

国際原子力機関 (IAEA) は7月4日、東京電力福島第一原子力発電所の「処理水」放出計画に関し、報告書を公表した。処理水の海洋放出は国際的な基準に合致し、それによる放射線の人や環境への影響は無視できるレベルと評価している。

処理水は事故で溶け落ちた核燃料デブリを冷却した後の汚染水を浄化処理し、トリチウム以外の放射性物質を取り除いた水である (実用化のレベルに達しているトリチウムの分離技術は、現時点において確認されていない)。政府の基本方針では、処理水を多核種除去設備 (ALPS) で再処理し、海水で薄め、トリチウム濃度を1リットル当たり1500ベクレル (Bq) 未満にして放出する。これは国の基準の40分の1程度、世界保健機関 (WHO) の飲料水基準の7分の1程度に相当する。放出は最初少量ずつで、海洋での環境影響を監視しながら30年以上続く見通しという。

トリチウムは環境に大量に存在し、雨水、水道水、飲料水などにも含まれている。私たちは食事や呼吸などでトリチウムを体内に取り込んでいるが、ほとんどは水と同じく体外に排出されている。また体内に蓄積して濃縮することはないため、魚などを食べても健康への影響を問題視するレベルにはならない。

KAKKINは、トリチウムを十分に薄めながら徐々に放出するという国の方針は理にかなったものであり、他に有力な選択肢がないことも理解している。そしてこの度のIAEAの報告書は、科学的、客観的に「処理水」放出計画を評価したもので、廃炉に向けて放出作業が進むことを期待する。

このように処理水の海洋放出が人や環境に影響を及ぼさないことは、科学的に明らかだ。それにもかかわらず、中国や韓国の野党は日本を非難している。これは純粋に政治的な理由によるもので、政府には毅然と対応してもらいたい。そもそも全ての原子力発電所では稼働すればトリチウムが発生し、それを海洋、河川、湖沼、大気に放出している。福島第一では事故前と同じく、毎年22兆Bqずつ排出していく計画だが、例えば中国の陽江原子力発電所では約112兆Bq、韓国の月城原子力発電所では約71兆Bqが海に排出されている (どちらも2021年)。本当にトリチウムの排出が問題だと考えているなら、まず自国の原子力発電所を止めるべきだろう。

処理水の海洋放出で唯一起こりうる問題は風評被害である。科学的根拠もなく「危ない、危ない」と騒ぐメディアや一部の団体が人々の不安を煽り、漁業者を苦しめ、復興を妨害し、近隣諸国との間に不要な摩擦を引き起こしている。

グロッシ IAEA 事務局長は7月5日に福島県いわき市において、「福島の方々と約束できるのは、処理水最後の一滴が安全に放出し終わるまで、IAEAはここにとどまる」と発言した。今後とも国際原子力機関 (IAEA) と連携して海洋モニタリングを継続して科学的なデータを示しつつ、国際的な信頼性・透明性の確保に努めることを期待したい。

以上